

四旬節第5主日（B年）

福音朗読 ヨハネ 12・20-33

2021. 3. 21

高円寺教会 9：30 ミサ

ビジュ・キシヤケール神父（吉祥寺教会主任司祭）

教会に新しい椅子が入って嬉しいですね。先日ここに来て、新しい椅子に気付きました。今までと違う聖堂、祈りの雰囲気も変わってくるわけですから、そういう場所として、教会の椅子も整って、祈りはもっとできるような環境を作ることができて良かったなと思います。それも教会の皆様のご協力のもとで出来たことだと思います。

さて、今日は四旬節第5主日を迎えています。今日の福音で、イエス様は自分の歩むべき道について語っています。それは、神の望みとして、すべての人の救いのために十字架の道を歩むという選択肢です。

わたしたちは聖書を読むとわかりますけれども、荒れ野で誘惑を受けたイエス様と出会います。40日間荒れ野でイエス様は誘惑にさらされ、それに打ち勝ちました。イエス様が宣教活動を始める前のことですね。そしてまた、誘惑は、聖書の中にある、十字架に架けられる前の園での話もそうです。そのときもイエス様は捕えられないように弟子たちを使うこともできたけれども、弟子たちも戦ったこともあれば、イエス様も「この誘惑から、この盃をわたしから取り去ってください」と祈る場面もわたしたちは聖書の中で読みます。皆さんも「パッション」という映画を見たことがあるでしょうけれども、その中ではっきりと、わたしたちは辛いほどのイエス様の姿を見ることができます。

それから、聖書に書かれているのは、十字架上での誘惑ですね。「あなたが本当の神の子であれば、十字架から降りて来なさい」という言葉。今まですべての人を清くしたり、罪人を赦したり、病気を治したりしたイエス様が、自分のことになると何もしないでいる、その姿。話によると、聖書の中にあるように最後の晩、園でペトロがある兵隊の耳を剣で切ったとき、それをイエス様は治してあげたわけです。最後の奇跡とされています。

そういった、自分より他の人のために救いの喜びを与えたイエス様ですけれども、今度は自分のことになると、全く何もしない。でも、イエス様はとても辛かったと思います。今日の福音の中にもあったように、どうしようかと迷っているイエス様のことですね。「わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってくだ

さい』と言おうか」。つまり、イエス様は自分の死について語っているわけです。辛い死が待っているわけです。それに向かって歩むわけですが、イエス様は人間として、この辛さを生きることができない、と思うわけです。でも、神様に任せます、と。「しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」と。これはもちろん神様の御旨に任せるというイエス様の心の中の思いですね。それを神様に任せるわけです。

そして、今日の福音の中にあつたように、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」と。それを考えると、イエス様が言った言葉は、イエス様自身がこの言葉通り働いたということです。自分のために何一つなさらず、人のために一所懸命努めたイエス様ですが、このイエス様は人のために一粒の麦のように死ぬわけです。そこから多くの人に救いへの道を切り開くわけです。

その十字架上での、兵士の一人からの最後の言葉、「あなたが本当に神の子であれば十字架から降りてみなさい」という誘惑の言葉をわたしたちだったらどう受け止めるでしょうか。「いろいろやっているのに何もわたしのことを理解してくれない。じゃあ、わたしは見せてあげましょう」と思うのが普通の人間の思いだと思うんです。「わたしはこんなことができるよ。見せてあげましょう」というのが、わたしたちだったらやってしまうんじゃないかと思うんです。しかし、イエス様は人間でありながら、その最後の誘惑にも打ち勝って、神の栄光を表すわけです。

もちろん、人のために死ぬことはわたしたちには難しいかもしれませんが、わたしにとってこの「一粒の麦」というのは何でしょう。わたしたちは、自分を一粒の麦として考えれば何をできるのか、信仰者として考える必要があるのではないかと思います。

わたしたちは誰かのために何かを差し出すとき、必ず何かが起こります。それこそが神様の業であり、そこに神の働きがあるということです。必要なことは、わたしたちはなにかをする、ということです。なにもしなければ何も変わりません。でも、自分から何か進んで人のためになるように動くとき、必ず実が結ばれます。

わたしたちはもちろん、イエス様のように十字架で死ぬということは難しいでしょう。でも、自分で出来ることは、それは自分の時間、自分の大切だと思っていること、時間であったり才能であったり物であったりします。そういったものを自分のためだけではなくて、人のためにも使うときに、わたしたちの喜びも人の喜びも倍になるわけです。わたしの時間はわたしだけの時間だと思う、あるいはわたしの才能は自分のためだけだと思う、わたしの物は自分だけのものだと思ったら、それは自分だけに限られてしまうわけです。一粒の麦になるというのは、小さなことでも相手の喜ぶことを行うことではないかと思えます。無理にやるのではなく、心からこの神様の言葉を

受けて、日々人のために努めたいと思います。

来週はイエス様の受難の主日を迎えます。この四旬節の中で、イエス様の受難と復活に心を向けて、わたしにできることは何だろうと考えながら生きて行きたいと思います。